

ガングーリ先生

第十一回育英生 宇野恭章

今年も残り少なくなり、こちらインドも朝夕は少し冷え込むようになりました。暮れも押し詰まったこのご多忙な時期に私の経過をご報告申し上げるのは誠に恐縮致しますが、ようやく私も深い悲しみを乗り越えることが出来るよう気がして参りました。

私は昨年から学位論文の作成に全力を注ぎ、十月までに第四章(五〇枚)、第二章(五五枚)、第一章(三六枚)の下書きを終えることが出来ました。すでに第三章(八六枚)は今年一時帰国していた時までに書き上げておりました。私の論文はそれに結論を加えた五章の構成になっ

ております。インドで初めて英語の論文を書くことになった私にとって、曲がりなりにも一つのことを続けることが出来たのは、偏にインドでの私の恩師ガングーリ先生のお陰でした。本来ガングーリ先生には毎週二回(月、木)私の部屋まで来ていただいていたのですが、私の指導教授がえていただいていたのですが、私の指導教授が学長の仕事で忙しいこともあり、昨年より私のことを心配されて論文を指導して下さっていた経緯は前にもお伝えしたと思います。そのガングーリ先生が十一月六日(水)に亡くなりました。六十三歳でした。その二日前の月曜日には

いつものようにお元気に私の部屋に來られていたにもかかわらず余りに突然でした。心不全ということでした。ご家族の話によれば、五日の夜、御手洗いで倒られたのですが、ご家族には大丈夫だと告げられ、そのまま眠られたそうです。しかし朝方容態が急変し、病院へ運ばれたときには手遅れだったようです。私は、当日の午後、指導教授のチョウドリ先生から連絡を受け一緒にご自宅まで伺い、ガングーリ先生の御遺体の前で泣き崩れました。インドではその日の内に荼毘に付します。火葬場まで御一緒させていただきました。この日ほど人の世の無常を感じさせられた日はありませんでした。

あれからもう一月以上経ちました。私も悲しんでばかりいるわけにも行かず、ガングーリ先生のご指導無しに残りの作業を続けています。本来、私の指導教授はチョウドリ先生なので論文提出に関する問題は無いのですが、相変わらず



ず忙しくされております。それでも何とか指導して下さる時間を頂いて十二月十一日、大学に論文の四千字の要約を提出しました。予定では十八日に大学でその発表をすることになっていきます。カルカッタ大学の博士課程の規則では、その発表のあと六カ月してから論文の提出資格が得られます。審査されるのはその後で恐らく、更にまた時間が必要だと思います。とにかくインドは時間がかかります。

心残りなのは、ガングーリ先生がおられる間に私が論文を大学に提出し、その後一緒にサンスクリットのテキストを読んで頂くことが出来なかったことです。本当の息子のようになつて頂いたガングーリ先生には、また、人生とは何であるかも教えて頂いたような気も致します。先生から指導して頂いていた日々が目に浮かびますが、感傷的になるのもうよします。ガングーリ先生は私の中でまだ生きておられる

からです。昨年は黒田先生も突然に御実兄の前角老師を亡くされどんなに心を落とされたことか、私も今回自らに省みておりました。

当面は学長業務のお忙しいチヨウドリ先生に何とかお願いして論文に関する全ての下書きを終わらせ、訂正箇所を探し出す作業を続けることになると思います。このような状況なので、もしかしたら年が明けて論文に関する作業が終わったら一時帰国することになるかもしれません。その際は宜しく御指導の程お願い申し上げます。

研究成果を挙げるのが、故ガングーリ先生、また善光寺育英会に報いる私の務めであると考え、日々精進していくつもりでおります。

合掌

一九九六年十二月十三日